

## 反省会より

# かえりみた畜産共進会

岡山県 畜産課

第19回の岡山県畜産共進会は津山市一方の家畜市場で、10月15日から3日間に渡って盛大に実施された。(11月号に詳細を掲載)

しかし、ここに問題が多々見受けられる。この共進会も19回を迎えたことでもあり、過去をふり返って見て、改善できるところは改善し、第20回は、より有意義な共進会にしたいという意向もあり、さきに関係団体と県との間で反省会が開かれた。

### 最大の効果を上げるための協力体制

まず、主催、これに伴う経費について討議された。従来主催は第1回から7回までは団体の主催で行われて来たのである。8回に至って県畜連の主催、県の後援という形が生まれ、9回も同様、第10回から県が主催、関係団体の後援ということとなり、12回に至って、開催地の市町村も主催者に加わることとなった。だが県の共進会は毎年実施されるものであり、また年中行事の中でも非常に大きいウエイトを持つものである。

このような行事を実施するに当って十分な経費が得られるのであれば、あまり問題も生じないであろうが、最小の経費で最大の効果を得ることは、県費支出をする上には当然のことである。県費で全経費を賄うということは不可能であろうと思われる。それを最大限に活用し、しかも意義のある共進会にするためには地元および関係団体の協力は絶対に必要なことである。しかしながら、岡山県主催では、協賛、後援体制が十分といえない現状である。

過去に、関係団体主催で行われたが、実施方法について考えてみるに、この方が効率的な運営ができるのではなからうかと思える。それは県を単位とした共進会であったが、団体主催の場合、県主催とはまた異なった感覚のもとに、各種団体の協力が得られると考えられる。

次に、共進会実施に当っての意義を考えて見ると

共進会は家畜の改良実績を検討し、最も改良目標に近い体型をもった家畜、また将来改良目標になりうる家畜を選ぶのである。このほか、共進会当日は、参観者のために展示し、講評を行うことは、共進会の内容中、重要なプログラムの一つでなければならない。

それにもかかわらず、現実には審査中の場内立入禁止、また審査終了後は上位入賞家畜の展示講評1回ということである。加えて、その時間が短く、十分参観に供することができなかつた。これは日程の強行性にあるとも考えられる。

この会期については、従来4日間であったが、今回は都合により3日間に短縮した。このため出品家畜はあらかじめ出品地区において測尺実施し、その数値を出品申込書に記入することとしたが、当日の審査に当って審査員中にその正確度に幾分疑義をもっている審査員が散見された。しかし大勢としては3日会期が適当であるとの意見が多かつた。

### 施設の高度利用はできないか

会場施設について見ると、今回は県下では施設の整った津山家畜市場で実施したのであるが、一部豚舎等の仮施設を建造することになった。これは、仮の施設ではあつたが、多くの経費を要した。ただこれが将来使用するのであれば、投資効果が得られるが、臨時建築であつたため経費の支出効果に問題が残っている。

### 出品点数の再検討

第一部の肉用種牛は、従来の割当頭数を基礎として、昨年70%とした。また、第二部の乳用種牛についても酪農組合別に割当をし、地元点数を少々増加させた。第三部の種豚にあつては、ヨークシャー種では出品希望が少なく、出品督励には加成りの努力を要した。ランドレースは今回が初出品であり、導入3年目では各出品者の改良成果を見ることは困

## 岡山畜産便り 1963.12

難な状態であった。

この結果、肉用種牛は十分な比較検討、展示公表をするために、なお出品頭数を減少させる必要があり、乳用種牛では、一部割当返上というケースもあり、今後は行政指導とタイアップできるような割当をすることが望まれる。種豚については、今後積極的出品が望まれる。

## 全県民的な「農業祭」にしよう

今回は災害その他で付帯行事が一切中止されたが、将来はこのような催しを通じて生産技術の改善及び経営意欲の高揚をはかるとともに畜産のみに止まらず、農業全般に対する認識を深めるための展示会、技術研究発表会、講演、講習会等を併せて実施し、全県民的な祭典（農業祭）とすることが望ましく、将来の畜産共進会は、この反省会を生かして、大きく発展することが期待できよう。